

箏と声による3年間の音楽科出張授業の考察：
ーリモート授業での成果を踏まえてー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): Koto, Teaching of Japanese instruments, Collaboration between vocal and Koto, Remote teaching, Guest teacher 作成者: 梅村, 憲子, 麻植, 美弥子, 北島, 恵美子, Umemura, Noriko, Oe, Miyako, Kitajima, Emiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029338

箏と声による3年間の音楽科出張授業の考察 —リモート授業での成果を踏まえて—

福井大学教育学部 梅村 憲子¹箏奏者 麻植 美弥子²福井県立高志高校・高志中学校 北島 恵美子³

梅村、麻植、北島の3者が協働で行った福井県立高志中学校第1学年に対する箏を中心とした音楽科の授業は、令和元年度より3年間継続して実践し、生徒たちに興味と関心とをもって受け入れられた。毎回、前年の反省を踏まえ、より良い授業となるようにブラッシュアップしていった授業実践の報告に加えて、コロナ禍で実践したリモート授業、さらに箏と声楽による日本歌曲の新しい可能性など、今後発展させていくべき課題についても考察する。

キーワード：箏、和楽器指導、声楽と箏のコラボレーション、リモート授業、ゲストティーチャー

1. はじめに (梅村)

ゲストティーチャーによる授業は、教育現場ではしばしば行われている。音楽科においては特に和楽器の題材でゲストティーチャーの役割は大きい。筆者らの高志中学校での出張授業は声楽を専門とする梅村、箏奏者麻植、中学校音楽科教諭北島、音楽専攻の大学生との協働で授業を作り上げたこと、さらに3年間継続して実施したことなどが特筆すべき点である。(資料1)

4者の協働によって作られた授業は子ども達にとっては単に箏を弾いたり講師演奏を聴くだけでなく、和と洋の音楽の融合、楽器と声のアンサンブル、大学生と一緒に厚みのあるアンサンブル、それを聴き合う力など、様々な要素の学びが可能となり、貴重な音楽体験となった。

授業に参加した学生にとっても単なる現場の見学に留まらないよう内容を工夫した。箏の調絃、子どもたちの演奏中の机間指導など箏の技能的な面に加えて、学生が歌い子どもが箏を演奏、クラス半分ずつの歌と箏のアンサンブルに交じるなど、子どもたちを慮りながらその場の音楽をリードする力も必要となった。さらに梅村と麻植というプロ演奏家と学生との共演も行い、通常の大学の音楽科の授業では経験できない得難い音楽体験の場となった。

本論文では北島、麻植、梅村、それぞれの立場から3

年月日	授業タイトル
2020.01.28	“箏”体験講座&ソプラノと箏曲の歌聴き比べ
2021.02.28	声と箏のアンサンブルを楽しもう！
2022.02.10	箏を知ろう、弾いてみよう、アンサンブルしよう (ビデオレターによる実施)

資料1 3年間の授業タイトル

年間の取り組みについて考察する。

2. 3年間の取り組みの変遷 (北島、麻植、梅村)

1) 中学校音楽科教諭としての立場から (北島)

① 1年目の取り組み

1年目は、「箏」体験講座&ソプラノと箏曲の歌聴き比べ〜と題し、生徒が箏やソプラノの演奏を聴き、箏やソプラノの音色を知覚すること、そして、「さくらりレー」を通して箏を演奏することをねらいとした。生徒が箏やソプラノの演奏を間近で聴き、和洋の音楽の融合を実感できたことは大変貴重であった。また、箏の演奏に対する基本的な姿勢や奏法を麻植から直接手ほどきを受け(資料2)、2人1組で演奏する《さくらりレー》にも集中して取り組んでいたことが印象的であった。

生徒からは「西洋から伝わったソプラノと古くから親しまれてきた箏がすごくあっていて、楽しむことができた」というコメントもあり、ねらいは概ね達成できた。



資料2 麻植による箏指導の様子

¹ 福井大学教育学部准教授。声楽家

² 福井大学教育学部非常勤講師。箏奏者

³ 福井県立高志高等学校及び高志中学校音楽科教諭

一方で、授業者として、生徒と講師、生徒と生徒のコメントをつなぐことをもっと意識すれば、より生きた授業になったという反省もある。

(1年目の内容は『福井大学教育実践研究』第45号2020、pp.1-9に掲載)

②2年目の取り組み

2年目は、『声と箏のアンサンブルを楽しもう!』と題し、“アンサンブル”という視点を大きなねらいにした。古謡《さくらさくら》を生徒皆で歌って合わせるアカペラでのアンサンブル、大学生が演奏する箏に合わせて生徒が歌うアンサンブル、そして生徒が箏と歌に分かれてお互いにアンサンブルをするなど、アンサンブルを主眼に置いた。生徒たちは色々な立場で“合わせる”ということ意識し授業に臨んだ。最初にアンサンブルとは何かを生徒たちに発問した際、「合わせる」という答えが返ってきた。そして、合わせることを「同じ速さで、同じ呼吸で、同じ気持ちで」といった言葉で表していた。当日のプログラムは次の通りである。(資料3)

1. みんなで歌ってみよう「さくらさくら」アカペラバージョン
2. 大学生の箏の伴奏で「さくらさくら」を歌おう!
クラスの仲間の声を聞いてみよう!
3. 「お箏について」箏奏者麻植美弥子先生による説明
4. 「さくらりレー」を弾いてみよう
 - ①大学生のデモ演奏を見よう
 - ②1面の箏を2人で弾こう!
 - ③みんなの箏の伴奏で大学生に歌ってもらおう!
5. 講師の先生の演奏を聞こう
 - ①吉崎克彦作曲《風にきけ Part II》(抜粋)
(お箏で何を描いているのか想像してみよう)
 - ②橋本国彦作曲 林柳波作詞 河副功編曲《お六娘》
(登場人物や情景を想像しながら聞こう)

資料3 2年目のプログラム

授業を終えて、生徒たちの感想の一部を紹介する。
「アンサンブルの方が全体的にまとまりもあり、春の情景がより鮮明に想像できた気がしました。特に最後の音のつながっている部分は、桜が散ったような感じがしました。」

「どちらか一つが主役ではなく、二つの音回しがお互いの良さを引き立て合っていて、二つの音どちらも主役だと思った。」

「アカペラでは、日本の音楽の特徴がつかめるようなものを感じたが、箏とのアンサンブルでは、『さくらさくら』の優雅さなどが感じられ、声のなめらかさとの融合がとても曲を引き立てていました。」

「講師の先生の演奏を聴いて、左手をうまく動かして余韻の波を変えたり、爪ではなく手で弦を引っ張ったりしてはじくことで高い音でもリズムが良く、聞いていて鳥肌が立ちました。機会があればまた聴きたいです。」

今回の授業のねらいは“アンサンブル”、合わせることをいろいろな手法で取り入れたが、アンサンブルに対して、これまでよりも深くイメージしている感想があった。

そして、今回も、ソプラノと箏の二人の生演奏により、生徒たちは心が動いていた。自分たちが実際に歌ってみて、実際に箏を演奏してみて、最後に講師の演奏を聞くことにより、集中力が増し、心から音色を味わっていた。

また、1年目に課題として掲げていた“教師が生徒の意見をつなぐこと、共有すること”も実践できた。アカペラで歌ってみての感想、大学生の箏の演奏で歌ってみての感想、さくらりレーをしてみても感想など、その都度、生徒たちからの言葉をつなぐことで、生きた授業としての共有ができたと思う。

課題としては、このプログラムをすべて実践することはできたが、授業の終末に振り返りの時間を持てなかったことである。最後の生徒用アンケートは、授業内ではなく、クラスに持ち帰って実施してもらった。50分授業の中で、このプログラムを実施し、生きた授業とすること、アンサンブルすること、そして時間配分を大切にすること、いずれも完璧に達成するためには、さらなる授業の組み立て、授業づくりが必要だと感じた。

③3年目の取り組み

3年目は、1,2年目の反省を生かし、アンサンブルすること、生きた授業とすること、時間配分を考えること、そして教科書に出てくる歌曲を取り入れてさらに箏と歌が身近に感じられるようなプログラムを、梅村と麻植と相談して作成した。

しかし、本校でのコロナ感染が拡大し、出張授業予定日の前日から本校は臨時休校となってしまった。がっくりと肩を落としていた矢先、梅村と麻植から“ビデオレター”が届いた。なんと、出張予定日に大学生たちと協力して、私たち高志中学校1年生のために、“ビデオレター”を作成してくださったというではないか。

そこで、学校が再開した後、1年生音楽科ではビデオレターによる授業を実施した。まるで講師や大学生が実際に本校に出張しているかのように、ビデオの中で生徒に呼びかけ、提示し、箏で演奏したり、模範唱をしたり、説明したりし、授業が展開された。(3年目のビデオレターによる授業については第3項で詳細を記す)

2) 箏奏者、ゲストティーチャーとして(麻植)

①音楽科担当教諭の熱意と事前打ち合わせの重要性

麻植はこれまでゲストティーチャーとして数多くの学校で音楽鑑賞や箏のワークショップを行ってきたが、それらが単発の授業で終わってしまうのではなく、年間の授業計画の中の一つのピースとして組み込まれていくべきであると考えている。そのためには教員との丁寧な事前打合せは極めて重要である。

教員の“どのような授業を行いたいか”、“生徒に何を

気付かせたいか”という希望に沿い、ゲストティーチャーが鑑賞内容や実技指導プログラムを提案していくことで、毎回新たなオーダーメイドのオリジナル授業プログラムが出来上がる。(事前打ち合わせなどの詳細は2022年度福井大学教育・人文社会系部門紀要に掲載予定)

北島は、自身の年間授業計画・方針について確固とした考えを持っており、こちらの質問に先んじて明確な方針を示しただけではなく、生徒に対する熱い思いも同時に伝わってきた。出張授業の成否は多分に音楽科担当教諭の熱意と力量に左右されることが多いが、その意味で北島の存在は極めて大きかった。

②今回の出張授業の背景

通常の場合出張授業では、担当教諭との事前打ち合わせは出来ても、終了後の授業内容に関する検証や評価は教諭側で行い、ゲストティーチャーにまで詳細が伝わってくるケースはほとんどない。

それに比して今回の授業は大学からの支援(《福井大学教育学部地域の児童生徒に対する先進的教育提供事業》)によるものであり、教育学部に携わる者として事後の検証も重要であるとの認識を梅村・麻植・北島の3者が持っていた。そのため事前打ち合わせと共に、終了後も内容を十分に検証する作業を毎年行い、抽出した反省点を踏まえて次回の方針や狙いといった方向性を明確に打ち出せたことで、年々内容もブラッシュアップ出来たと考える。

また、今回の取り組みは箏とソプラノという異分野のゲストティーチャーと音楽専攻学生とで行う出張授業であったため、音楽を和と洋とに分けずにそれぞれの音楽を表現し、声楽と箏の素晴らしさを伝えつつ、和洋の融合の可能性を生徒にいかにも示せるか、さらに将来教壇に立つであろう音楽専攻学生の学びにも配慮したプログラムを組み立てた。

③音楽専攻学生の学び

2年目の学生アシスタントは全員麻植の箏の講義を受講しており、学生にとっては講義で学んだことの実践の機会となった。また、中学校側は複数の学生が補助に入ることで、生徒が細やかな指導を受けることが出来るメリットがある。

学生は事前準備としての調絃や、さくらさくらの箏演奏(中学生の歌唱とのアンサンブル)、さくらリレーの実演など、生徒への箏指導等を実際の授業で体験、体現することができ、彼らの授業力向上に与したと考える。

また声楽の授業も受講し、歌う力もある彼らが箏と声のアンサンブルに参加することで、中学生だけではできない厚みのあるアンサンブルとなり、生徒たちの聞く耳を育てることも期待できる。さらに参加学生にも事後アンケートを取り、実践した内容をフィードバックし、新たな視点や気づきを得ることが出来た。

さらにこのような箏と歌唱の合同授業は、十分とは言えない音楽の授業時間を補う視点からも、有効な取組みであったと考える。

④箏ワークショップメソッドさくらリレー麻植方式(以下さくらリレー)について

高志中学校では、生徒30名に対し15面の箏を準備できたため、2人に一面の箏を用いるさくらリレーⅡを3年間実施した。

さくらリレーⅡ(資料4、資料5)は、2人でワンフレーズごとにバトンタッチして、《さくらさくら》を完成させる。バトンタッチの時間に余裕を設けていないため、全体のテンポに揺れが生じやすい。しかし“チーム(2人)”でテンポの安定に取り組むことにより達成感が生まれる。〈花ざかり〉の後に思い思いのグリッサンドを入れさせ、平調子の音階を味わうと共に、爪音に思いを込めて奏でる体験もさせる。音楽授業内や音楽鑑賞とアウトリーチとを組み合わせた短時間での箏体験(15分-20分程度)を行う場合に適している

さくらリレーⅢ、Ⅳは、少ない面数の箏でワークショップを行う場合に適しており《さくらさくら》のいずれかのフレーズを担当して演奏する形式である。(さくらリレーⅢ、Ⅳの詳細は2022年度福井大学教育・人文社会系部門紀要に掲載予定)

さくらリレーⅠは、バトンタッチの時間に余裕があり、曲の完成度が上がる。ワークショップ(45分-60分程度)のみを行う際に有効である。



資料4 さくらリレーⅡ



資料5 大学生によるさくらリレーⅡ

3) 声楽家、大学教員として (梅村)

①出張授業での声楽と箏の共演による日本歌曲演奏

声楽家の教育現場へのアウトリーチ活動において日本歌曲はしばしば演奏されるが、筆者らは1年目より授業の内容を見据え、単なる名曲を聞かせるだけの講師演奏にとどまらず、演奏によって自分たちのメッセージである、1、音楽に和洋の垣根などないこと、2、洋楽と邦楽が一緒になることで音楽はもっと面白くなること、を子どもたちに伝えるための選曲を行った。

梅村は長きに亘り日本歌曲演奏に携わりその表現を模索し続けている。麻植も新作による洋楽器や声楽との共演を多く手掛けている。両者による演奏にあたって、子どもたちがそもそも芸術歌曲を聞く機会が少ないであろうことを考えると、斬新な新作ではなく、長く歌い継がれ淘汰されてきた楽曲を子どもたちに聞いてもらいたいとの梅村の強い思いから、既存の日本歌曲を箏伴奏に編曲し演奏することとした。

1年目と2年目に演奏した《お六娘》(橋本国彦作曲 林柳波作詞 河副功編曲)は、伴奏部分に祭囃子を模した音型が多用され、古き良き日本情緒をふんだんに表現した秀作である。畑中はこの曲を「新民謡の誕生」としている。(畑中 1991 p.51)

歌の旋律は軽妙洒脱。ユーモアたっぷりの林の詩に負けまいとするごとく、縦横無尽に駆け回る音型が付されている。歌としての難易度も高く、最高音は a2、f2-a2 による前打音、オクターブを超える跳躍音程の多用、ポルタメントの多用(7度、9度等)など、確実な技術なしでは演奏は難しく、その意味ではソプラノらしい楽曲であり、本物を聞いてもらいたいという筆者の意図に適した楽曲であったと言える。

1年目には日常では使用しない古い言葉についてプログラムに解説を付したが、さらに2年目には子どもたちの歌詞への理解の助けとして、資料6、資料7のようなお六娘や村の若者のイメージを喚起するための画像を配布した。

子どもたちのアンケートを見ると、普段聞く機会の少ないと思われるソプラノの音色について概ね好意的に受け取ってもらえたようであるが、参加学生による授業後のレポートには「講師演奏は教科書掲載曲など、子どもたちに親しみのある曲の方がよかったのではないかと

の意見があり、次年度への課題とした。(《お六娘》についての詳細は第2項1) ①と同論文に掲載)

②出張授業で学生が学ぶもの

この出張授業の特質の一つとして大学生が積極的に授業に関わっている点が挙げられる。

1年目は福井大学から高志中学までの5面の箏の運搬に加えて、授業開始までに15面の箏を調絃するための補助要員として学生を動員した。参加学生は麻植の前任者による箏の授業を受講しており、箏についての一通りの知識や技能は身に付けているため、子どもたちの様子を見て適宜助けてやってほしいとの声かけをしておいた。しかし、あきらかに箏を弾くことに困っている様子の子どもの見ても手を出さず、傍観者然としている状態であった。

通常の授業参観では参観者が積極的に子どもにかかわることはないためその気持ちが抜けず、1回きりの出張授業で実技を伴うのだから手出しをしてもよい、むしろすべきであるとの、こちらの意図が十分伝わっていなかったのであろう。学生との事前の打ち合わせが足りなかったことは大きな反省点であった。

2年目は1年目の反省に基づき、第2項資料3にあるように授業計画の中に学生の出番を組み込んだ。

“学生の箏で中学生が歌う”“大学生のデモ演奏(さくらリレー)”では、弾き間違えなどないように正しく良い演奏をするために、当然事前に入念に箏を練習する必要がある、8コマしかない箏の授業を補強するものとして有益であった。さらに中学生のためにという意識を持つことで真剣度は増し、彼らの箏演奏の技術は大いに向上した。“中学生の箏で学生が歌う”についても事前に歌の練習が必要であることは言うまでもない。

アンサンブルに必要な“相手を聴き合わせる力”は相手が中学生である以上、学生側により大きな期待がかかる。その結果学生たちは中学生と自分たちとの音を集中して冷静に聞き、臨機応変に最も適切な音楽的判断を次々と下しながら演奏するという、アンサンブルの妙を実現していた。

それは、座学や文献では決して学ぶことのできない、その場その場で消えてしまう音楽というものの美しい特質の経験となり、授業実践を学ぶという意義を超えた、他では決して経験できない音楽の本質を学んだ貴重な場であった。

今回の出張授業での学生の役割、授業に臨む前にその教科の知識や技能の向上が必要であり、授業を通じて教科の本質を見つめる体験が可能となるような役割、を学生に課すことは、彼らの教育現場での授業体験の質を高めるためにも、様々な分野において我々大学教員が進めていくべきものであろう。



資料6



資料7

3. 3年目のリモート授業について

1) 実際のリモート授業について (北島)

先述の通り、令和4年2月10日に実施予定の《声と箏のアンサンブル講座》は、本校が臨時休校となったため、講師たちの暖かい提案と学生の協力により、“ビデオレター”という方法で、本校で2月28日(月)に、プログラムの内容を進めることができた。

当日は、本校の邦楽部から箏を5面借りて、もともと音楽室にある10面と合わせて15面の箏を準備した。北島が顧問をしている高校合唱部員の協力を得て、15面の箏と30脚のパイプ椅子を音楽室に並べ、前日に調絃を済ませた。さらに、ビデオレターをプロジェクターで大きく映すために、音楽室前方にはスクリーンと、ホワイトボードを用意し、ビデオを視聴する時間と実際に歌ったり箏を演奏したりする時間配分を考えた。

当日のプログラムは、次の通りである。(資料8)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 講師たちと大学生のアンサンブルを聴こう
《花の街》
1,2番：大学生 3番：梅村 箏：麻植 2. 《お箏について》箏奏者麻植美弥子先生による説明 3. 講師の先生の演奏を聞こう
吉崎克彦作曲《風にきけ Part II》(抜粋)
(お箏で何を描いているのか想像してみよう) 4. 《さくらリレー》をしよう <ol style="list-style-type: none"> ①大学生のデモ演奏を聞こう ②1面の箏を2人で弾こう ③みんなの箏の伴奏で、みんなで歌おう |
|--|

資料8 3年目のプログラム

1, 2, 3に関しては、基本的にビデオを視聴し、一項目が終わるたびに一時停止をし、生徒にコメントを発表させ、コメントを板書し、意見をつなぎながら授業を進めた。4に関しては、①のデモ演奏を視聴した後、生徒は2人組になり、さくらリレーを練習した。交互に何度も練習するペア、できないところだけを取り出して練習するペア、最後のグリッサンドを工夫しようとするペア等、どのペアも与えられた時間を意欲的に練習していた。さくらリレーの最後にグリッサンドを自由に入れる場面では、ペアによって様々な工夫が見られたので、発表は1ペアずつ行った。同じ列にいるペアが歌い、ほかの列にいるペアは鑑賞する立場で、交換発表を行った。さらに2年目の課題であった時間配分も留意し、授業時間内に振り返りのアンケートを行うこともできた。

授業を終えて、生徒たちの感想の一部を紹介する。
「箏の音の大きさが声にぴったりで、とても聴きやすかった。3番までで、情景の移り変わりを表しているような感じで、素敵だった。」(《花の街》視聴)
「箏の演奏に迫力があって、ビデオからでも聞き入りました。」(《風にきけ Part II》視聴)
「思っていたよりも激しい弾き方もあって、とても興味

を持ってました。先生の弾く箏はとても美しく迫力がありました。」(《風にきけ Part II》視聴)

「箏は、日本の昔ながらの音楽ばかりだと思っていましたが、箏で弾いているのかと思うくらい激しくてかっこよかったのでびっくりしました。」(《さくらリレー》演奏)
「さくらリレーで、ほかの人と音を合わせるのは難しかったが、自分と音や他の音を聴きながら楽しめました。」(《さくらリレー》演奏)

「かき爪やわり爪など、初めての知る言葉が出てきて、勉強になりました。」(自由記述より)

「箏に触れるのは授業が初めてだったけれど、左手も使って響きを意識するときにきれいに弾けるとわかりました。」(自由記述より)

「箏を弾くのは思っていたよりも楽しく、うまく弾けたときは嬉しかったです。箏でテンポの速い曲を弾いていらっしやる姿はとてがかっこ良かったです。」(自由記述より)

「梅村先生と麻植先生の声と箏がぴったり合っていて、素晴らしい演奏に心が惹かれました。その2つを実際に体験できたことも嬉しかったです。」(講師へ)

「丁寧にビデオレターで教えてくださってありがとうございました。先生の演奏が印象に残っています。すごく貴重な機会をありがとうございました。」(講師へ)

「風にきけ Part2 がとてがかっこよくて、僕も箏に興味を持つことができました。家でも箏のことを調べてみたいですね。今日はありがとうございました。」(講師へ)

「コロナ禍で大変なのに、ビデオレターで僕たちに箏を教えてください、ありがとうございました。おかげで、箏を弾くのが好きになりました。」(講師へ)

生徒たちの感想にもある通り、今回のビデオレターでのリモート授業は大きな成果があったといえる。ビデオの中ではあるが、アンサンブルや講師の演奏が視聴でき、ビデオを停止したら自分たちが練習し、また一緒に合わせることができる、ある意味画期的で身近な授業スタイルであったと感じる。ビデオの中であっても箏の迫力は生徒に伝わっているし、音色や強弱による変化もしっかりキャッチできている。コロナ禍であっても、事前の準備が整っていれば、リモートで授業ができる可能性を示した事例であると確信した。

2) 箏奏者の立場から (麻植)

①教材としての可能性

今回作成したビデオレターでは、中学校教諭が初めて箏の授業を行う上で必要となる基礎知識や奏法を凝縮した説明を行っており、教員側で指導書などの豊富な資料の中から取捨選択する必要がない。

今回のビデオは梅村と麻植による北島へのヒアリングを行い、北島の授業案・目標を受けて作成されており、当該授業で必要とされる内容だけで構成されている点が、既存のデジタル教材との大きな違いである。高志中

学校の生徒という具体的な生徒を想定したことも教員にとっての使いやすさに繋がったと考えられる。

ビデオには大学生がさくらリレーを演奏している様子も収録しており、子どもたちが授業で行う内容について、言葉での説明だけでなく視覚的に見ることが出来たことも、授業のスムーズな進行の一助となったと北島から報告を受けている。

授業を受ける子どもたちの集中力を切らさないという観点から”スムーズな進行”は非常に重要な項目である。“分かりやすいこと”、“興味を引くこと”、“集中力を途切れさせないこと”のうちどれが欠けても、子どもたちはすぐに別の対象へ意識を移してしまうが、本ビデオレターを用いた授業では子どもたちから分かりやすかったとの意見も多く寄せられており、スムーズな進行という意味でも、今の学校現場で求められている教材としての役割を十分に果たせるものであったと考える。同時に、教員の授業準備にかかる負担を大幅に減らせることが明らかになった。

ビデオレターならではの授業の進め方や、他の学校への同様の展開など、新たな可能性も垣間見えたことは幸いであった。

②声楽と箏伴奏による日本歌曲演奏

箏とソプラノという異分野のゲストティーチャーが生徒に伝えたいことは、それぞれの音楽の輝きだけでなく、その融合の可能性にある。しかし名作とされるピアノ伴奏の日本歌曲を箏伴奏で演奏するためには、新たに箏のための編曲が必須となる。

1年目と2年目は橋本国彦作曲、林柳波作詞《お六娘》(河副功編曲)、3年目は團伊玖磨作曲、江間章子作詞《花の街》(伊藤慶佑編曲)を演奏した。

伊藤は編曲にあたって次のようなコメントを寄せている。「ピアノと箏の音域の差異、および箏に独自の奏法や情緒をどう内包させるかが課題であった。最終的には歌詞の〈1番・2番〉と〈3番〉とでのスタイルを変化させることで対応した。すなわち、〈1番・2番〉では、箏の西洋的な伴奏形(バスラインと和音のシンコーション)を保持することで、ピアノと箏との単純な比較聴取を目的とし、〈3番〉ではより日本的な「間」や箏の演奏様式の体感に重きを置き、メロディーは保持しつつも原曲から比較的大胆に変更した」(伊藤談)

3) リモート授業がもたらしたもの(梅村)

①《花の街》《さくらさくら》について

3年目はコロナ禍により授業の対面実施が不可となったため、ビデオレターを大学で作成し、北島にはビデオレターを使用しての授業を依頼した。ビデオレターと共に子どもたちに内容を記したプログラムの配布を行うよう依頼した。(資料9)

講師演奏については、前年度の参加学生の意見を踏ま

えて、共通教材である《花の街》(團伊玖磨作曲 江間章子作詞 伊藤慶佑編曲)を選曲した。(資料10)



資料9 ビデオレタープログラム

詞・江間章子
作曲・團伊玖磨
編曲・伊藤慶佑

花のまち

Moderato

資料10 花の街(箏編曲)1ページ目

授業の目標をアンサンブルとしたことから、講師演奏についても“プロの演奏を聴く”から“様々なアンサンブルを聞く”ことへとシフトし、1番、2番は箏(麻植)と学生、3番を箏(麻植)と梅村で演奏した。1番、2番は慣れない箏伴奏でも学生が歌いやすいようにピアノ伴奏から音型を大きく変えない編曲、3番はがらりと雰囲気を変えて箏本来の奏法を多用し、歌パートはバラードのような雰囲気を持った編曲となり、子どもたちにプロの演奏を聞いてもらうという観点も盛り込めた。

ビデオレターによる授業で子どもたちにどこまで伝え

られるのか危惧されたが、授業後に寄せられた子どもたちのアンケートを見ると《花の街》の曲自体のわかりやすさと、中学生と年の近い大学生も加わった事もあり、1年目、2年目と同様に楽しんで聞いてくれたのではないかという印象を受ける。

さらに授業の中心曲である《さくらさくら》も、講師と大学生による声と箏とのアンサンブルの形で演奏した。(資料11)

ビデオレターでの授業を北島が様々な工夫し、最良の形で提供してくれたことにより、子どもたちは《さくらさくら》を自分たちと講師たちが一緒に演奏しているかのように感じてくれているとのアンケートのコメントもあり安堵している。

目の前にはいない講師たちの演奏を真剣に聞いてくれた生徒たちの姿勢は、北島のこれまでの教育の効果とビデオを使用する際の渾身の工夫によるものであることは言うまでもないが、中学生対象にビデオを用いたアクティブラーニングの一例として、大いに評価されるべき取り組みであったと考える。



資料11 梅村、麻植、学生4名による《さくらさくら》

②学生が学んだもの

学生たちはビデオを録画している時は自分たちのしていることの意味がわからず、自分たちの演奏が子どもたちにどのように届くのか不安があったようであるが、長時間に亘る撮影に集中力を切らさず真剣に向き合ってくれた。

北島の集計した授業後の子どもたちのアンケート結果を共有後、学生に課したレポートには

「男女問わず生徒の音楽に対する意欲の高さみたいなものを感じた」

「ただ「すごかった」ではなく「〇〇なところがすごかった」というように理由までしっかり書かれていて、しっかり学びがあったことが感じられた」

「私自身も出演したことで達成感を得ることができた」

「うまくは弾けなかったが、楽しく弾けたという感想に、音楽の授業の在り方を感じた。授業の中で扱うたくさんの楽器や曲などがうまくできるようになるほどの時間は設けられていなくても、でできなかった…という思い以上に、楽しかったというプラスの感情を与えられるように導くことこそ音楽の授業と感じた。その意味でこのコ

メントはすごくうれしい言葉だった」

「今回は箏中心の授業なので箏とのアンサンブルだったが、他の楽器との多彩なアンサンブルにも興味を持ってもらえるのではないかなと感じた」

「一つの楽器をみんなで協力し、音楽をみんなで共有することにより、音楽の魅力の一つである、他者と共感・共鳴する子どもたちの様子が見える様で嬉しい」

などであり、子どもたちの反応を喜ぶだけでなく、音楽の授業そのものを考察する機会となったようである。

音楽の場合、生の演奏に勝るものはないことは言うまでもないが、提供する側と授業者の確かな技術と熱意があれば、映像は音楽的意思伝達のツールとなること、中学生に対してビデオによる音楽の授業の可能性が示されたことも学生にとっては大きな収穫であった。

コロナで本当に様々な不便な制限が課せられた2年間であったが、今回のビデオ撮影と子どもたちの反応は、学生らの今後の教員生活において、音楽を教えるということについての自信に繋がったのではないだろうか。

梅村と麻植だけの映像では子どもたちの心への届き方は全く違ったに違いない。学生の奮闘が今回の成功の一つのカギであった。学生諸子に感謝したい。

4. 今後の展望、課題など(北島、麻植、梅村)

1) 中学校音楽科教諭としての立場から(北島)

この3年間の実践を振り返り、今後の展望を考えた時、次の2つのことが浮かんできた。

1つ目は、中学1年生を対象にしたこの講座の対象を、次の学年(中学2年)にも継続することである。中学1年生で《さくらりレー》を体験し、ペアで演奏できるようになった生徒たちが、次の中学2年になった時、その知識と技能を生かし、この講座を少し発展した形でつなげていくのはどうか。例えば、ペアでできたさくらりレーを、一人で演奏できるようになること、例えば、さくらりレーを発展版として少し難易度を上げて演奏するなど、中学2年生にも発展した形で継続したことも考えられる。あるいは、少し別の奏法を取り入れて学びが展開されることは授業者としては、大変ありがたいと考える。

2つ目は、中学生ではなく、高校の芸術科音楽の授業に音楽科出張授業として実践することである。高校でも、和楽器を取り入れることは必須であり、毎年、その和楽器の取り扱いにどうするかを迷っている。

《さくらさくら》は、中学校の時に体験している生徒がほとんどで、《さくらさくら》をさらにたくさんの奏法を取り入れて授業をしたり、《六段の調》を抜粋した形で演奏したりしているが、高校版としてどのような形がふさわしいのか、正直悩んでいる。そこで、出張授業を高校版にし、ソプラノと箏の融合も含めて、芸術的部分、生活と社会につながる部分に迫れたのなら、これ以上嬉しいことはない。高校版での出張授業を希望する。

2) 箏を用いた授業の有効性 (麻植)

①継続の重要性と創作授業での活用

本論文で北島も箏を用いた授業の継続の重要性を述べているが、山本⁴・堀江⁵によると

『『小学校学習指導要領解説音楽編』(平成29年7月)では、次のように改訂の趣旨が述べられている。これまで第5学年及び第6学年において取り上げる旋律楽器として例示していた和楽器を、第3学年及び第4学年の例示にも新たに加えることとした。また、我が国や郷土の音楽の指導に当たっての配慮事項として、「音源や楽譜などの示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」を新たに示した。このように、伝統音楽の取り扱いがより重視されている。小学校低学年から伝統音楽のひとつであるわらべうたの世界に浸り込み、その良さを味わうことや親しみを持つ経験を通して、中学年以降の伝統音楽の教育へと繋げていくことが求められている。』(山本・堀江2019 pp.79-80)

と、小学校低学年から高学年に至るまで継続し繋げていくことの重要性を述べている。

小学校の低学年から高校までを通し、継続して音楽授業に用いるとの観点で“箏”を見た場合、誰でも簡単に音が出せ、箏ならではの奏法を用いることによって様々な音色を生み出せるため、創作に適した楽器であるという特質が挙げられるであろう。

第2項2) ④でも述べたが、さくらリレーでは創作の導入として自分の思いやイメージを音にすること、桜の花びらが舞い散る様子や風が吹く様子などの情景を思い描き、心を込めてグリッサンドを入れるように子どもたちに声掛けをしている。

学年が異なったり生徒の音楽的レベルが違って、平調子などのペンタトニックスケールを用いれば容易に創作ができ、様々な奏法を習得することにより、生徒一人一人のオリジナルな作品が出来上がる。

箏を用いた創作活動に関する尾藤⁶の先行研究にも、「特に、創作活動には有効であり、創作学習経験の少ない学習者でも取り組み易く、箏の様々な奏法は、実に多様な音楽表現が可能であると実感している。」(尾藤2006 p.149)

と、箏を創作授業に用いる有効性についての記述がある。

大学での麻植の講義後の学生のレポートには、「授業の中で、創作をすることで、全員が全く違う創作をすることができたので、とても自由な楽器だと感じた」、
「箏をどうやって演奏するかを考えていくという活動で、

自分から学ぶ主体的姿勢をとることができ、教えを享受するだけでなく、学びを深めることができたと感じた」、
「柔らかな思考の子どもたちが、自由な奏法を使って曲を創る授業をしたい」

「箏で使用される平調子というペンタトニックスケールを用いることによって簡単に創作活動を行うことができると知った。日本特有の和音の響きや五線譜を使用せず数字で理解できる楽譜の構造など、初めて箏に触れた私でも理解しやすい点が多かったため、工夫次第で深い学びが得られると実感した」

「創作活動を通して児童の創意工夫を凝らした、自由な作品作りに取り組み、音楽的な感性を養っていくことができるのではないかと感じた」

「巾から一の弦まで鳴らすだけで一度は耳にしたことのある日本ならではのメロディーを奏でることができる」などの記述があり、学生たちが箏を用いた創作授業の可能性や有効性を見事に感じ取ってくれたことは、麻植にとって大きな喜びであった。

②本事業の他校への広がりへの期待とオーダーメイドのビデオレターによる音楽授業の可能性

梅村と麻植は2021度に声と箏の指導について県下小中学校の音楽科及び音楽担当教諭に対してアンケートを実施。アンケート結果を受けて音楽科教諭及び音楽担当教諭に対する講座(リモート配信)を実施した。(アンケートと講座についての詳細は2022年度福井大学人文社会系部門紀要に掲載予定)。

講座後のアンケートの中には「箏が1面もなく自分も音楽専科ではないので、実技ができていない。Youtubeを見て4台の大正琴でさくらを演奏させている。箏の体験授業をお願いしたい」というものもあった。

個々の出張授業の要請には時間的、体制的制約から十分に対応できないことも考えられるため、この項ではビデオレターによる授業展開の可能性について考察する。

3年目の出張授業がコロナ禍で対面授業が中止となった代替策として制作したビデオレターは、北島の指導案に沿ったオーダーメイドオリジナルビデオである。前項3,1)で北島が述べているように、事前の準備さえ整っていれば、ビデオレターを用いた授業が可能であることが確認できた。

対面での出張授業が難しい場合、今回の様なビデオレターでの対応が考えられるが、各学校ごとの細かな希望に沿ったオーダーメイドビデオレターの作成は、時間的な制約もあり困難であろう。そのための解決策として以下の様な方策が考えられる。

1, 県下の各学校に対し以下の様なアンケートを実施する。

- ・出張授業を希望するか、希望しないか。
- ・出張授業の年間指導計画での位置づけ、ねらい、めあて等の把握。

⁴ 山本寛愛 近江八幡市立沖島小学校教諭

⁵ 堀江伸 滋賀大学大学院教育学研究科 高度教職実践専攻(教職大学院) 特任准教授

⁶ 尾藤弥生 北海道教育大学岩見沢校特任教授 作曲家

- 2, それらを集約分析し共通の希望項目を類型化し、いくつかのパターンであらかじめビデオレターを制作。
- 3, それらのセミオーダーメイドのビデオレターの中から希望に近いものをその都度選択して提供する。

以上のような方法は教育現場の先生方が和楽器授業で悩んでおられる現状を鑑みると、検討の余地はあると考える。

③音楽関連の伝統・文化を学ぶ極めて有効なツール

麻植は箏による海外公演を通じて、自国の文化を知り大切にすることが様々な国の文化を尊重することにつながり、それが真の国際性を育むことになると痛感した。

2016年の中央教育審議会の答申では、音楽、芸術（音楽）に関する項目の中で、具体的な改善事項として、教育内容の改善・充実について「グローバル化する社会の中で、子供たちには、芸術を学ぶことを通じて感性等を育み、日本文化を理解して継承したり、異文化を理解し多様な人々と協働したりできるようになることが求められている。このため、音楽に関する伝統や文化を尊重し、実感的な理解を深めていくことが重要である」と述べている。（中央教育審議会答申 2016 p.164）

また『小学生の音楽1～6』の教授用資料（教育芸術社平成30年～31年度版 p.6）には「児童や学校の実態に応じながら、児童が無理なく取り組むことができ、我が国の音楽の良さを感じ取れる和楽器を選ぶことである」とある。

箏は誰でも簡単に音が出せ、伝統的な日本の音色が感じられる楽器であり、子供たちに我が国の音楽のすばらしさを伝えるには極めて有効なツールである。さらなる広がりを目指したい。

3) 大学教員としてできること（梅村）

麻植も折に触れて述べているが、外部講師の授業は1回限りのものとなりがちで、教育現場の先生方にとっては自身の年間の指導計画の中にどのように入れ込み、前後の授業との関係性を位置づけしていくのが課題であろう。我々の取り組みでは梅村、麻植、北島が事前に相談を重ね、北島のそれまでの授業の流れを把握し、意図するものを汲み取り、意見交換を行ったうえで出張授業に臨んだ。それによって子どもたちは普段の学びを中断することなく外部講師の授業を受け、新しい学びを加えられた。

さらに、3年間継続して行うことでお互いの理解が深まり、考察を重ねて授業の内容を深化することができた。また、3者にとっても立場と専門性の違う3名による意見交換は、新鮮で大きな刺激と知見を得られるものであった。

さらに、リモートでは難しいと思われがちな音楽の授業が、提供者の熱意と授業者の工夫によって、その意図するところが子どもたちにしっかりと伝わり、目の前に

はいない講師と子ども達の距離感が縮まり、親しみすら感じてくれていることが、子どもたちのアンケートから見て取れる。音楽科においてもビデオを用いたりリモート授業の有効性が示されたと言えよう。北島の努力と奮闘は想像に難くなく、心からの謝意を表したい。

また、学生たちにとっても3回の出張授業で学んだことは非常に大きく貴重なものである。北島という授業巧者の、テンポよく子どもたちを導く姿を目の当たりにし感銘を受けたことであろうし、子どもたちのためにも、自分の専門とする教科の力をつけることの必要性も学んだであろう。何より楽しい授業に子どもたちの目が輝き生き生きと音楽する様子や、ビデオレターによる授業の感想により、音楽が子どもたちにもたらすものの力、音楽という教科に対するやりがい、自信と誇りとを感じてくれたのではないかと思う。

本論文で麻植は小学生からの継続した学び、北島は次の学年や高校での継続について言及しているが、音楽科における他の項目、合唱や合奏、鑑賞などと同様に和楽器も継続した一貫性のある学びが可能となれば、子どもたちにとって“箏体験”は“箏の経験”となり、生涯に亘って幅広い音楽を愛好する下地となろう。外部講師である大学教員の果たすべき役割は大きい。

また、2021年度に音楽科教諭に対して行ったアンケートにも「大学教員に講師として来てもらいたい」との要望もあり（アンケートの詳細は2022年度年福井大学教育・人文社会系部門紀要掲載予定）それぞれの分野の専門家として教育現場からの大学教員への期待は大きく、教育現場の先生方と連携を取りながら共に学び続けることの必要性を強く感じる。

今後も音楽教育においても学校教育こそが子どもたちの力をつける最も重要な場であるという筆者の信念を先生方と共有していきたい。

謝意

最後に、3年間に亘る福井大学からの《地域の児童生徒に対する先進的教育事業》の支援と、この取り組みを快諾してくれた高志中学校の関係者各位に心からの謝意を表します。

凡例：文中の括弧等は以下の通りである

曲名、授業タイトル《 》

書名『 』

引用箇所及び中学生、大学生の意見「 」引用部分斜体強調箇所“ ”

引用文献

尾藤弥生 「創作活動における箏活用の有効性に関する一考察」『北海道教育大学紀要 教育科学編 第56号2』（2006）、149頁

畑中良輔 『日本歌曲について』 ビクター音楽産業 (1991)、51 頁

山本寛愛・堀江伸 「「わらべうた」の特質を生かした授業の実践研究 — 子どもが創るリズム表現に注目して」 『滋賀大学教育学部紀要 教育科学 77 No.69』 (2019)、79-80 頁

教育芸術社 教授用資料「移行期における音楽科の指導～我が国や郷土の音楽の取り扱いのポイント～」(平成30-31年度)、13 頁

中央教育審議会(中教審197号)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』(2016年12月21日) 164 頁

引用楽譜

さくらりレー麻植方式 <http://oekoto.web.fc2.com/>
團伊玖磨(江間章子作詞、伊藤慶佑編曲)《花の街》未出版

引用絵画・写真

佐々木林風 《かるきほてり》(少女画報1918年3月号より)フリー絵画 2020年1月10日閲覧

<https://publicdomainq.net/sasaki-rinpu-0032135/>

フリー素材《祭り》Photo AC 2020年1月10日閲覧

<https://www.photo-ac.com/main/search?q>

参考文献

小原光一他『MOUSA 1研究資料編』教育芸術社(2022)

土肥みゆき『20世紀の音楽家たち』ソーケン(2006)

四家文子『橋本国彦歌曲集1』音楽の友社(1995)

Considerations on 3 years of music department outreach programs for singing and Koto playing : Based on the success of remote classes

Noriko UMEMURA, Miyako OE, Emiko KITAJIMA

Keywords : Koto, Teaching of Japanese instruments, Collaboration between vocal and Koto, Remote teaching, Guest teacher